

## 2000年以降わが国死因別年齢調整死亡率と

### インフルエンザ・COVID-19 超過死亡

Excess mortality due to influenza and COVID-19 in Japan: in consideration of structural change in cause of death from 2000 to 2015

逢見憲一 (国立保健医療科学院生涯健康研究部)

Kenichi OHMI (Department of Health Promotion, National Institute of Public Health)

e-mail [ohmi.k.aa@niph.go.jp](mailto:ohmi.k.aa@niph.go.jp)

**【目的】**2021年以降世界的に流行しているCOVID-19によるわが国の健康被害を定量的に把握し、2000年以降の死因別死亡の推移と合わせ考察し、わが国の医療および公衆衛生政策に資する。

**【方法と資料】**月別年齢階級別死亡率を算出し、前年同月の死亡との差を月別年齢階級別の超過死亡率とした。これと2020年10月分人口から、超過死亡数を推計した。資料には、人口動態統計月報(概数)および総務省統計局人口推計各月1日人口の日本人人口を用いた。

**【結果】**1. 2020年1月から12月の超過死亡: 超過死亡数(全国, 男女総数)は、ほぼ毎月負値を示し、合計46,327人、すなわち、前年の2019年から5万人近く死亡が減少していた。

2. 2021年1月以降の超過死亡: 同様に、2021年1月から9月の超過死亡は、合計32,049人であった。これは同時期のCOVID-19死亡数の合計16,044人の2倍程度であった。

3. 死因別超過死亡数: 2021年7~9月の死因別超過死亡数(2020年10月人口換算)をみると、「22200 その他の特殊目的用コード」(COVID-19)が4,814人で超過死亡の31.3%を占め、「18100 老衰」が2,705人で17.6%、「09200 心疾患」が1,968人で12.8%、「10600 その他の呼吸器系の疾患」(主に「誤嚥性肺炎」)が1,966人で12.8%と続いていた。

4. 死因別死亡の2019年からの推移: 2021年7~9月の死因別死亡数(2020年10月人口換算)の2019年の同月同死亡数からの変化をみると、増加した死亡は、「18100 老衰」が3,788人と最も多く、次いで「その他の特殊目的用コード」(COVID-19)が3,687人と次ぎ、「その他の呼吸器系の疾患」(主に「誤嚥性肺炎」)が1,895人と続いていた。また、「18300 その他の症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの」「06300 パーキンソン病」「05200 その他の精神及び行動の障害」も増加していた。減少した死亡は、「10200 肺炎」が-5,868人、「09300 脳血管疾患」が-1,749人、「02100 悪性新生物<腫瘍>」が-1,444人、等であった。

**【考察】**わが国では、COVID-19流行の始まった2020年1月から10月までは、年齢調整死亡率は減少して負の超過死亡を示していた。これは人の流れの抑制等により、インフルエンザ超過死亡などが減少したためと考えられる。同年秋以降、死亡は増加に転じ正の超過死亡がみられたが、COVID-19死亡数を大幅に上回る超過死亡は観察されなかった。

2019年からみると、2021年の死因別死亡の傾向は、「脳血管疾患」「悪性新生物」が減少し「老衰」、「誤嚥性肺炎」が増加する等、わが国の2000年以降の死因別死亡変化の傾向が反映されている一方、「肺炎」が大きく減少していた。2021年5月から9月の死因別超過死亡死因別は、COVID-19および「肺炎」の大幅な減少を除けば、「老衰」、「誤嚥性肺炎」が多く、死亡水準が2019年以前に戻っていた、あるいは老人ホーム等での死亡が増加していた可能性が考えられる。